

越境を支える制度と実践

——北ラオス村落社会における出家行動の変遷と〈地域〉の再編

吉田香世子

はじめに

本稿は、ラオス北部の一農村で行ったフィールドワークをもとに、仏教の制度化や中央集権化が人々の実践に及ぼした影響について考察する。国家の制度が形成する実践と、人々が国家の制度を捉え直していく過程を検討し、地域社会の変容と再編のダイナミズムをミクロな視点から明らかにすることがその目的である。

ラオスはインドシナ半島のほぼ中央に位置する内陸国で、中国、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマー（ビ

ルマ）と国境を接している。一九世紀末にフランスの植民地となり、一九五三年に王国として独立を達成した。しかし、冷戦体制のもとで内戦が続き、一九七五年に社会主義政権が誕生する。二〇〇五年の統計によれば、総人口は約五六〇万人、その半数近くをラオ人が占めるとされる（SCCPH 2006: 15）。現在の公称では四九、一時期は一〇〇以上とも数えられた民族集団が混住する多民族国家である。

ラオスの現行憲法（一九九七年制定、二〇〇三年改正）は諸民族の平等を謳い、伝統文化の保護育成を保障する。また、国教を定めず信仰の自由を認めている。現在公示される宗教と信徒の割合は、六六・八％の仏教徒を筆頭に、

キリスト教徒が一・五%、バハイ教徒とイスラーム教徒が各一%未満、その他三〇・九%、不明〇・七%である (SCCPH 2006: 14)。

ラオスで広く信奉される上座仏教は、教理上の出家主義と僧俗の区分を特徴とする。出家者とは、二二七の戒律を守る二〇歳以上の僧侶(比丘)を指し、一〇戒を守る見習僧(沙彌)がこれに準ずる。出家者は文字通り家を出て、サンガと呼ばれる修行組織に加入する。原則として生産活動を行わない出家者の修行生活は、在家者の寄進によって支えられる。喜んで食事や金品を捧げ、寺院の建設や修復に資材や労力を提供する人々の背後には、出家者への物質的支援によって功德を積み、未来の幸福を得ることを願う価値観が存在する。

社会主義の時代を迎えたラオスでは、革命直後に人民革命党政府が托鉢を禁止するなど仏教を抑圧する姿勢を示した。しかし、大躍進・文化大革命下の中国やボル・ポト政権下のカンボジアのように寺院の破壊や強制還俗は徹底されず、積徳行も存続した。党政府の強硬姿勢は徐々に和らぎ、対外開放政策を導入した一九八〇年代半ば以降には、仏教を統制下におきながら国家の開発に積極的に利用する方向に転換して今日にいたる。

筆者が調査を行ったNT村は、現在の中国雲南省西双版纳から南下したルー(Lue)の人々が草分けとなり、約

五〇〇年前に成立したと伝えられる。自称・他称を含むルーは現在、中国雲南省を中心にミャンマー・シャン州、ラオス北部、タイ北部に分布し、ラオス全土に約一二万人が居住するとされる (SCCPH 2006: 15)。言語学的にはラオと同じタイ・カダイ語族に属し、モチ米を主食とする食文化も類似している。上座仏教を信仰する点でも共通するが、しばしばルーは移住の記憶と結びついた精霊祭祀の独自性を指摘される (SNLSS 2005: 38-43)。すなわち、ラオスにおけるルーは、文化的には大きく多数派に属しながらも、多数派の内部にあつては少数派に位置する人々といえる。

NT村は、ラオス北部の中心都市ルアンパバーンから一〇〇kmほど北にあるナムバーク郡に位置している(図1)。古くは水上交通の要所として栄えたナムバークは、歴史的に多種多様な集団が行き交い、入り混じるように暮らしてきた。現在、住民の半数以上を占めるのはモン・クメール系の諸集団であり、おもに山間部に居住する。他方、ラオをはじめとするタイ系民族の多くは平野部に集住している。そうしたなかで、NT村は標高五〇〇mほどの山間盆地にあり、隣接するルーの村々を除くと、モン・クメール系やモン・ヤオ系の人々と接する機会が多い。

シブソーンパンナーの「ルーのムアン(くに)」からの移動史を伝承するNT村は、定着後、植民地期までルアン



図1 ラオス北部

(注)県境は調査時(2004～2005年)のもの。2006年1月13日公布
首相令第10号によりサイソンプン特別区を分割統合。

パバン王国の勢力下におかれた。内戦中は王国政府軍と左派勢力パテート・ラオが対峙する激戦区となり、人々は山中での避難生活を余儀なくされる。革命後は農業集団化を経験し、まもなく自由化・開放化を迎えると、伝統的景観と美的慣習を保持する村として、二〇〇二年に情報文化省が認定する「文化村」に選定された。

現在、村行政の中心者は住民が選出する村長であり、ほかに人民革命党が認知する村レベルの代表としてネオホー

ムという役職がある。同党の管轄下にある女性同盟や青年同盟も村支部を結成しており、幹部たちはNT村が教育や医療保健、農業振興などのモデル村たることを誇らしげに語る。その一方で、住民たちはNT村周辺を「ルーの村」、郡の中心部は「ラオの村」と呼んで区別し、言語や服飾、儀礼祭祀、その他の伝統慣習の独自性を主張する。また、郡中心部に暮らす人々も「精霊を信じる」「生肉を好む」といった語りによって「ルーの村」としてのNT村の特殊性を強調することが多い。

従来、東南アジア大陸部における宗教と社会の研究は、平地と山地、多数派と少数派、仏教と非仏教、中心と周縁、さらには制度と実践という二項対立的な図式で地域の実相を説明することが多かった(林 2009: 4)。NT村のルーは、そうした枠組みのいわば「狭間」に位置する人々である。そして、ラオスのような多民族社会においては、国家や言語、宗教、民族など、さまざまな境域の重なりの上に暮らすことがむしろ常態といえる。

本稿は、北ラオスの村落社会に生きる人々の仏教実践を取り上げ、多民族社会における制度と実践のダイナミクスを描き出す。そのことを通して、近年の社会変化のなかで人々が受け継ごうとしてきたつながりの実態に迫るとともに、相互関係のなかに生成し、変動する場として地域を捉える視点についても言及したいと考える。

なお、本稿で用いるデータは、おもに二〇〇四年九月から二〇〇五年一二月にかけて実施した現地調査によって得られた一次資料に基づく。この間、筆者は基本的にN T村のある一家のもとに寄宿し、聞き取りと参与観察を行った。また、仏教関連資料については、後述するネオラオサーンサート（ラオス国家建設戦線）宗教局およびラオス仏教連盟協会での聴取と内部資料に依拠している。

I ラオスにおける仏教

1 制度化の過程

東南アジア大陸部における上座仏教は、多様な民族の分布や伝統的な国家の枠を超えて広まった歴史をもつ（村上2009: 173）。ラオスでは、最初の統一国家とされるラーンサーン王国が成立した一四世紀中頃、創始者ファームがアンコールから仏教使節を招いたと伝えられている。ラーンサーン王国は一八世紀にビエンチャン、ルアンパバーン、チャンパーサックの三王国に分裂し、いずれも当時のシヤム（タイ）宗主権下におかれた。しかし、その支配は伝統的な朝貢関係の域を出ず、各国は高い自律性を保った。仏教の一大中心地として栄えたビエンチャンには、シヤム

やカンボジアなどからも多くの出家者が留学していたことが知られている（Ivarsson 2008: 120; McDaniel 2008: 33）。その後、シヤムの侵攻を受けてビエンチャンが荒廃すると、大勢のラオスの出家者が教理学習の機会を求めるなどして東北タイやバンコクに向かうようになる（林 2003: 215-216）。伝統的な国家間の確執をよそに仏教上の交流が続き、ラオスでは教法、パーリ語学習の面でシヤムとの結びつきが強まった（林 2004: 172-175）。

ところが、フランスによる植民地統治は近代的な領域国家の概念に基づき、国家を枠組みとする政治的・経済的・文化的なまとまりを实体化しようとした。ラオスにおけるシヤムの影響力を遮断しようとしたフランスと、シヤムへの対抗意識を抱くラオ人エリートとの思惑が重なり、仏教はラオス文化の重要な柱と位置づけられた。そしてその復興を目指す取り組みこそが、ラオス仏教の制度化の端緒となった。

一九二八年、出家者に関する規則が定められ、ラオスのサンガは植民地行政の管理下におかれた（McDaniel 2008: 46-47）。一九三一年にビエンチャン、三三年にはルアンパバーンに仏教協会が創設され、パーリ語学校や図書館などを設置して仏教文化の保護に努めた。仏教協会はまた、仏教教育制度の近代化を視野に入れ、教理学習を容易にするためのラオス語表記の改良を試みている（矢野 2008: 28・

31)。

その後、一九四七年に制定された王国憲法は仏教を「宗教」と定め、国王をその「至高の擁護者」と明記した（衆議院法制局他 1987: 67）。一九五一年に「サンガ規則を定める勅令第六二号」、五九年には「勅令第一六〇号」が公布され、国家と仏教との具体的な関係が規定された（石井 1979）。一九五九年の勅令によれば、ラオスのサンガはパサンカラート（法王）を頂点として個別寺院の出家者を底辺とする階層的な統一組織を編成する。個々の出家者は特定の寺院に所属し、身分証明書を携行しなくてはならない。サンガに対する国家の介入は地方行政の各レベルにおいて顕著であり、住職や高位僧官の選出に事実上の拒否権をもった。この五九年勅令は、一九六二年と七〇年の二回にわたって改正が行われており、七〇年の改正では警察に出家者の捜査・拘束と還俗強制権を認めるなど、サンガの法的自治はいちじるしく弱められた。

このような統制の強化に対し、反感を抱いた一部の出家者は反政府活動に加わった。内戦が始まると、パテート・ラオを支持する僧侶が自発的に、あるいはラオス革命党（一九五五年結成。七一年にラオス人民革命党と改称）の傘下に連帯組織を結成したとされる（吉田 2009a: 786）。他方、王国政府はタイの影響を強く受けたタムユット派の僧侶を宣伝活動に用いるようになり、ラオスのサンガは事実

上、二派に分裂して並存した。

社会主義体制樹立後、タムユット派と在来派の区別は廃止され、旧来のサンガは「ラオス仏教連盟協会」に再編された。革命当初、党政府は極楽と地獄、徳と業の観念を迷信として否定する一方、国家に対する貢献によっても積徳は可能とするなど、教義の新たな解釈を試みた。さらに、出家者の托鉢を禁止したほか、政治集会への参加を義務づけ、仏教儀礼の簡素化や党政府綱領に沿う説法を強制した。住民の要望により托鉢禁止の措置はまもなく撤回されたものの、大勢の出家者がタイなどへ亡命し、あるいは還俗するなどして国内の出家者数は大きく減少した。

急進的な社会主義化は次第に行き詰まり、抜本的な改革に迫られた党政府は、一九八六年、チンタナカーンマイ（新思考）政策を唱え、社会主義の枠内で自由化・開放化を進める方針を打ちだした。社会的統制も緩和され、仏教に由来する伝統行事が大々的に執り行われるようになる。一時は衰退した出家活動もさかんになり、二〇〇七年度の全国の仏教寺院は四一四〇寺、僧侶は八〇五五名、見習僧は一万一七四〇名である（OPSL 2008: 3）。

2 サンガ組織

現在、ラオスのサンガは党政府、実質的にはネオラオサー

ンサートの統制のもとにおかれている。チンタナカーンマ
イ政策の採用に伴い、一九八九年に開催された第三回全国
サンガ代表者大会において、ラオス仏教連盟協会が正式に
発足した。一九九八年には、社会主義体制下では初の成文
化された基本法である「サンガ統治法」が採択され、新時
代に入ったラオスの対仏教サンガ政策が具体的に示される
ことになった（OPSL 1998）。

この「統治法」は、ラオス仏教連盟協会をラオスの全仏
教徒を統括する最高機関と定義する一方、党政府による「保
護と育成」を明記する。特筆すべきは、八戒を日常的に遵
守する男女の修行者を僧侶や見習僧とともに出家者とみな
し、統制の対象に含めた点である。また、仏教連盟協会は
行政区分に対応する組織を構成し、中央・県・郡・個別寺
院レベルに設置された管理委員会がそれぞれ党政府機関と
連携する（図2）。さらに、個々の出家者は本籍となる寺
院への所属と身分証明書の携行を義務づけられ、戒律と国
法、伝統慣習に従うほか、教育や医療、社会福祉などの諸
活動に積極的に関わること、および国家の発展に寄与すべ
きことが謳われた。なお、サンガ統治法は二〇〇五年に改
正され、仏教連盟協会の各部署の業務と管理職の条件規定
および出家資格制限を明確化している（OPSL 2005）。

社会や国家に貢献するサンガのあり方は、制度的にも裏
づけられている。ラオス仏教連盟協会が組織する「サンガ

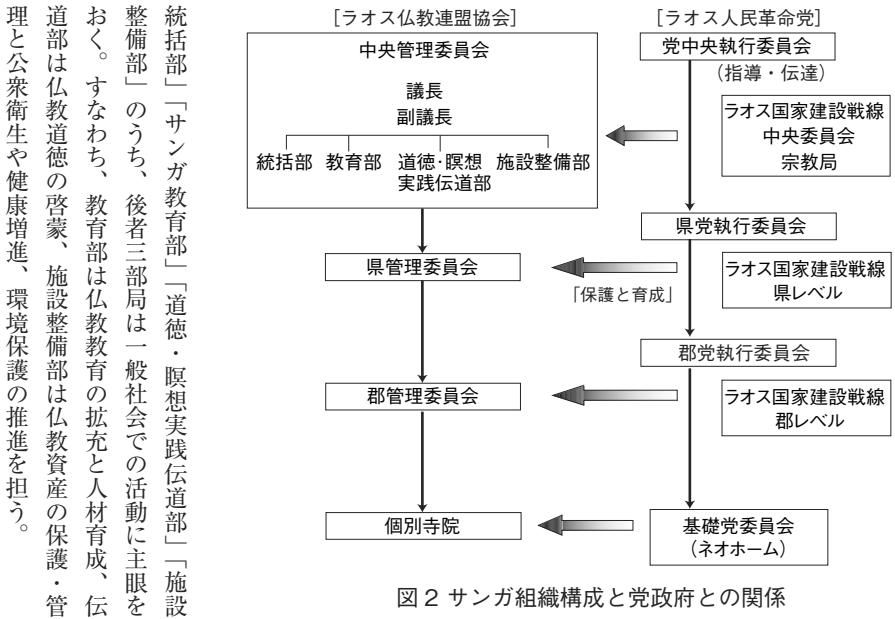


図2 サンガ組織構成と党政府との関係

とくに教育への取り組みとして、仏教連盟協会は出家者のための教育機関、いわゆるサンガ学校を整備してきた。

もともとラオスの仏教寺院では、僧侶や元出家者が仏教の教説やパーリ語、算術、天文学、薬剤知識などを教授する伝統があった^{*2} (Lebar and Suddard eds. 1960: 53; Dommen 1985: 136; Condominas 1998: 43-46)。

革命後、寺院の教育機能に着目した党政府は教理学習に加えて世俗教育のカリキュラムを導入し、一般教育課程と同じ五・三・三制を採用して同等の卒業資格を認めた。学費は基本的に無料であり、卒業後の進路も制約されない。幅広い知識と技術をもつ人材の育成を掲げるサンガ学校は、おもに経済的貧困層や地方出身者の受け皿となり、二〇〇七年度には全国のサンガ小学校一二校、中学校三三校、高等学校一一校、大学二校におこて六一三六名の生徒が学んでいる (OPSSI 2008: 3)。

このような時代の流れのなかで、サンガの中央集権化と制度化は地方へも及んでいった。地域社会における仏教実践は、国家の管理統制によってどのような影響を受けたのか、次にその実態について述べる。

II 地域社会の仏教実践

1 「慣習」としての仏教

NT村のルーの人々が、いつ、どのように仏教を信奉するようになったのかという歴史を裏づける文書資料は存在しない。一説によれば、ラーンサーン王国の創始者ファーム王の統治下に仏教を受容したとされる。また、かつてさかんであった精霊祭祀は、一九四〇年代半ばにその非合理性を主張する住民がルアンパバーンから高僧を招き、「村の守護霊」を追放して以来、表向きは否定されるようになった。今日、NT村の人々は仏教にのみ帰依すると主張する。しかし、そのあり方は地域的な特徴を強く示している。

そもそも東南アジア大陸部の上座仏教徒社会では、パーリ語教典で伝授される教義を共有する一方、実践のうえでは多様な地域差があることが知られている (cf. 田辺編 1993; 林編 2006, 2009)。ラオスにおいては大きく北部・中部・南部で印象が異なり、さらにそれぞれの地域社会に特有の実践がみられる。出家慣行についても、ラオスの中部・南部では僧侶の得度を重視するが、北部では見習僧としての出家が一般的である (林 2008: 381)。

NT村では、現在もルーの男子のほとんどが一〇代前半で見習僧としての一時出家を経験する。出家によって「成熟した人間」(khon suk)と認められるほか、還俗後、出家期間に応じて付される「チャン」(長期の出家経験者)、「カーン」(僧侶経験者)、「マイ」(見習僧経験者)の呼称は社会的地位を示す指標となっている。また、村の寺院ではビエンチャンの寺院で用いられる古ラオ語の経典文字(タム文字)ではなく、「ルーの文字」(nangsue lue)な「ルーのタム」(tham lue)と人々が呼ぶ独自の教典文字によってパーリ語教典を学習する。そしてその読誦は、ビエンチャン式の発音に較べて抑揚の大きい「ルーの発音」(sangsue lue)で行われる。さらに戒律では禁止されているはずの午後の食事を家族とともに摂るなど、独自の教義の解釈が浸透している。

過去に出家経験をもつ年配男性の多くは仏教に関する知識が豊富でルー文字の読み書きに優れ、主要な経典を諳んずることができる。仏日には八戒または一〇戒を守る老壮年の男女が寺院で精進潔斎し、日没まで念誦して過ごす。その他の住民も寺院に参詣する際にはルー式の誦句によって三法帰依や戒の授受、経典の念誦を行っている。

ラオスで広くみられる仏教儀礼もNT村では独自の形態で実践される。たとえば、他の地域では旧暦四月(新暦三月頃)に行うことが多いジャータカ誕生祭を、NT村では

早稲の収穫が一段落した旧暦一〇月に開催する。内容も仏陀の前世を描いた大生経を拝聴する点は共通するが、NT村の場合、死者の追善供養と新たに出家した見習僧の祝福を主目的として五日間にわたり盛大に執り行う。また、旧暦五月に行われる新年の祭りでは全世帯が寺院への寄進を行う一方、精霊に供物を捧げて慰撫する慣行が続いている。

NT村の人々は、このような仏教のあり方を「宗教」(sasana)ではなく「慣習」(viri)という言葉で説明する。そして、自分たちの実践こそが仏陀の教えにより忠実であるとして、同じ仏教徒であるラオとの共通性よりも差異を強調する。人々が独自の実践を維持していることは、しかし、彼らが近代以降に成立した国民国家の諸制度や中央集権化とまったく無縁であったことを意味するものではない。

この地域の寺院がラオスのサンガ組織に組み込まれるのは、一九六〇年代以降のことである。それ以前から出家者が「遊行」と称して各地をめぐることは珍しくなく、年配者の多くはウドムサイやルアンパバーンを歩いた経験をもっている。それは将来的な帰村を前提とする移動であったが、内戦の激化に伴い、ルアンパバーンにいた出家者がビエンチャンからタイへと渡り、バンコクの寺院に避難した。他方、NT村周辺ではバテート・ラオの解放区となった後、政府による出家者の管理統制はほとんど機能しなく

なる。政府軍による爆撃を避けるため山中に避難した人々は、簡素な小屋を建てて寺院とみなし、出家式を執り行った。出家者は徴兵を免除されたため、僧侶として得度するものは平時よりも多いくらいであった。

社会主義体制への移行後、精霊祭祀をはじめとする「迷信」は批判の対象となり、仏教儀礼の開催も自粛するよう要請された。ジャータカ誕生祭は、戦前まで隣接するルールの村と開催日をずらして競い合うように饗宴を繰り広げていたのが、村ごとに簡素を旨として行われるようになる。出家慣行は存続したものの、小学校が義務教育となり、卒業後に出家するのが一般的となった。

今日、NT村の寺院はラオス仏教連盟協会の個別寺院レベルに相当する。サンガの運営に中心的役割を果たすのは、村長と在家総代のコーンワット、ネオホームである。とくにネオホームの権限はきわめて強く、施設の整備や儀礼の進行、寄付金の管理など多岐にわたる。また、出家と還俗、他の寺院への移籍もネオホームの許可を必要とする。ネオホームの報告は党の郡執行委員会から県、中央へ伝達され、反対に中央の方針がネオホームを介して村に伝えられる。ここ数年は、伝統文化の保護政策により仏教儀礼の復興に意欲をみせる一方、公衆衛生の観点から治療儀礼の廃止を呼びかけるのが党政府の基本的な立場である。

とはいえ、村の日常生活においてこうした統制が意識さ

れることはほとんどない。ネオホームの活動にしても、従来、年配の俗人男性が果たしてきた役割に重ねて理解されている。また、ネオホームも住民の健康や経済、村の連帯が損なわれない限り、小規模な精霊祭祀や治療儀礼は「慣習」として許容する態度を示す。

このように、NT村における仏教は党政府による管理統制を受けつつも、実践的特徴的な部分が「慣習」として継承されている。しかし同時に、制度化によって形成された実践もみられる。その代表例が次に述べる見習僧の移動である。

2 出家行動の変遷

既述のように、NT村では男子の出家経験は一人前の証であり、かつては還俗後も村落社会に生きることを前提としていた。ところが一九八〇年代以降、世俗教育の充実する都市部の寺院へ移動する見習僧が激増し、還俗後も移動先に留まるようになる(図3)。

ラオスの学校制度は、革命後、初等教育五年、前期中等教育三年、後期中等教育三年に改められ、それぞれ小学校、中学校、高等学校で行われることになった。^{*3}サンガ教育についてもスポーツを除く世俗教育カリキュラムとの提携が企画され、旧体制下で教育省の管轄下にあった仏教教育協

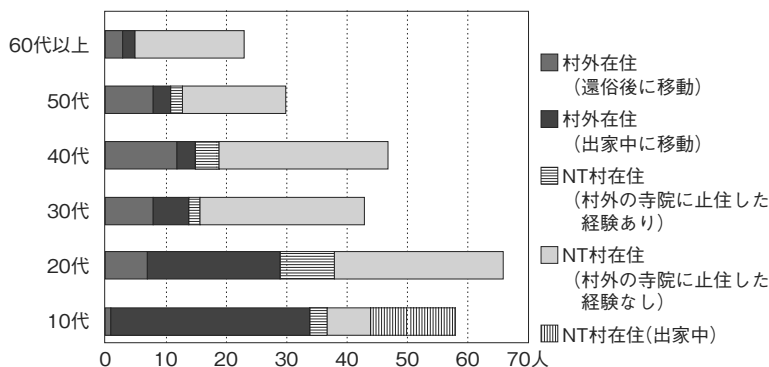


図3 NT村出身者(男性)の移動経験と現在の居住地

(注)聞き取り調査をもとに筆者作成。

会をサンガ中等・高等師範学校に改組するとともに、サンガ小学校および中学校を設置した(Maha Khanyad 2006: 170)。その後、一九九六年に公布された「サンガ教育に関する首相布告第一三九号」でサンガ学校の制度を定め、教育省の支援のもとに仏教連盟協会がサンガ教育を管理・運営する体制が確立する。一九九六年にはビエンチャンの高等師範学校が大学に昇格し、二〇〇六年にチャンパーサックに新たな大学が開校した。

NT村では、一九八〇年に二人の見習僧(ともに一九五九年生)が政府推薦により初めてビエンチャンのサンガ高校(当時の高等師範学校)に進学した。彼らは卒業後まもなく還俗すると、一人は公職を歴任し、一人は渡米して経済的成功を収めた。続いて一九八九年にサンガ高校に進学した見習僧(一九七〇年生)は、さらにバンコクのマハーチュラーロンコーン仏教大学に留学し、還俗後はビエンチャンで就職した。

おりしも、一九八〇年代から九〇年代初頭にかけて、NT村では農地を求めて、あるいはより便利だという理由でナムバーク郡近郊に移住する人々が続出する。すでに一九六〇年代までにNT村周辺の開拓余地は消滅しており、戦後の人口増加が耕地不足を深刻化させた。また、市場経済が浸透するにつれ、日用品や建築資材の購入、現金による納税、さらには病気などの不測の事態に備えて現金

収入を必要とする機会が増えていった。そうしたなかで、NT村からルアンパバン、ビエンチャン、タイへと移動しながら学業を続ける見習僧が相次いだ。

一九九〇年代半ばころまでの見習僧の移動は、一面では村の暮らしに将来を見出せない若者たちの「賭け」ともいえるべき性格を備えており、親世代の反応は必ずしも肯定的なものではなかった。しかし、高い教育を修めることが社会的・経済的成功に結びつくという理解した親たちは積極的に子弟を都市部へ送り出すようになる。一九九〇年代後半になると、出家した男子はすぐにビエンチャンに向かうようになり、移動時の年齢も一〇代前半に低下した。近年、郡の中心部にある普通中学校への進学も増加しつつあるものの、ほとんどの男子は見習僧としての出家後、ビエンチャンのサンガ学校に進学している。

筆者が滞在していた二〇〇四年から二〇〇五年には、村の寺院に止住していた一八名の見習僧全員がビエンチャンへ移動し、村の歴史上初めて出家者がいなくなるといふ事態が生じた。日常的な積徳行や仏教儀礼に支障を抱え、隣村から出家者を招請せざるをえなかった住民たちは、かつてない状況に困惑しつつも、「仕方ないさ、誰だつて出て行きたいのは一緒なのだから」と複雑な心情を吐露していた。そのような声をよそに、見習僧の多くは都市部への憧れを語り、村を出ていくことに躊躇を示さない。

このような現状を踏まえ、次節では、見習僧が移動しながら外部社会に参入していく過程について検討する。

Ⅲ 越境とコミュニケーション

1 移動の経験

国土の九割を山地・高原・丘陵が占めるラオスでは、現在も陸上の道路網の整備は万全とは言いがたく、地域間の移動は困難であり続けている。ビエンチャンからルアンパバンまでは飛行機なら約四〇分の距離だが、陸路では一〇時間以上かかる。また、ルアンパバンからナムバーク郡の中心部までは車で三時間以上の道のりであり、NT村まではさらに四〇分ほど険しい山道を走らねばならない。このような現状から、陸上交通が発達する前のNT村の人々にとって、ビエンチャンがいかに遠いところにあつたのが想像できる。

NT村の見習僧が都市部を目指すようになる一九八〇年代当時、ルアンパバンへ行くには舟で河川を下り、最短でも三日を要した。また、ビエンチャンへと続く幹線道路では交通事故や強盗事件が多発しており、ある父親は「今生の別れを覚悟して」我が子を送り出したという。道路事

情が改善し、バスでの移動が抵抗なく行われるようになるのは一九九〇年代半ば以降のことである。

一九八〇年代から九〇年代にかけてビエンチャンに移動した見習僧の多くは、自力で止住する寺院を捜し求めた。当初は標準ラオス語の使用に戸惑い、「ルー」と馬鹿にされるが多々あったという。「ルーの見習僧は数が少なく力もない。何もかも初めてで、すべて自分でしなくてはならなかった」(一九七〇年生。一九八九年にビエンチャンに移動)という苦勞を重ねた彼らを頼り、やがて、NT村から見習僧が次々と身を寄せるようになる。

NT村の見習僧が移動先で戸惑うのは、ラオス語の使用ばかりでない。ビエンチャンの寺院では「ルーの文字」と似て異なる經典文字を学ぶほか、ビエンチャン式の読誦を習得する。儀礼作法も村のそれとは異なり、所作のひとつひとつを見よう見まねで覚えなくてはならない。午後の食事が禁止されているため、慣れないうちは空腹に悩まされる。新たな環境で彼らがまず頼りとするのは同村出身者であり、頻繁に連絡を取りあうなどして支えあう(写真1)。

反面、移動先では多様な人々と知りあい、交流を深めていく。教えを仰ぐ「師」と「弟子」の関係は生涯にわたる重要な絆と考えられており、同じ師に学ぶ輩も特別な縁にあるとみなされる。全国から集まった出家者と共同生活を送り、苦樂をともにするなかでしばしば「親友」と呼びあ



写真1 ビエンチャンの寺院に集うNT村出身の見習僧たち

う知己を得るほか、学校ではさらに多くの「学友」と切磋琢磨して過ごす。

現在、ラオスのサンガ学校では仏教連盟協会の教育部が定める教理学習と教育省が定める世俗教育の二種のカリキュラムを教授している。前者は仏法と律、仏伝やパーリ語などの仏教に関する科目、後者は英語や文学、地理、歴史などの教養科目からなり、女性を含む多くの俗人が教鞭を執る。また、経済的余裕があれば専門学校や私塾に通い、さまざまな知識や技術を習得することができる。

タイへの移動については、一九九四年にバンコクへ、一九九七年に東北部ノンカイへ、一九九八年に北部チェンマイの仏教大学にそれぞれN T村からは初めて僧侶（いずれもビエンチャンで得度）が留学した。国内にサンガ大学は設置されておらず、世俗の高等教育機関も限られていた当時、ビエンチャンにはタイでの進学を目指す僧侶が大勢いた。ラオスの対外開放化を契機として地元住民の往来が活発となるなか、最初期にタイへ渡った出家者たちは、ビエンチャンで知りあったタイ人僧侶やタイ人実業家、あるいはタイに縁のあるラオス人僧侶の支援を受けて留学を果たした。このころにはラオス側、タイ側ともに出家者の留学に寛容であり、許可申請も容易であったという。

タイに渡った出家者は、当然のことながらタイ語を使用し、タイ語で書かれた教理教科書で学び、タイ式の読誦と儀礼作法を身につける。ラオス語とタイ語はともにタイ・カダイ語族に属する言語であり、文字や表記法こそ異なるものの非常に近い関係にある。そのためほとんどのN T村出身者は、タイ語の読み書きに苦勞しても、タイ語での会話をさほど困難と感じていない。N T村からビエンチャンに来たときの衝撃に比べると、タイでの生活には親近感を覚えることが多いという。ラオスにサンガ大学が設置されて以降、留学目的でのタイへの渡航は制限されるようになるが、英語やコンピュータなどの充実したカリキュラムに

惹かれ、タイでの進学を目指す出家者はあとを絶たない。

その一方で、タイに留学したN T村出身者の大多数は学業を終えると直ちに帰国する。「滞在し続けたところで、自由がない」（一九七六年生。一九九七年にノンカイ、一九九八年にチェンマイに移動）という言葉の裏には、彼らがタイで感じたラオス人に対する差別意識のほか、法的な制約が絡んでいる。簡易旅券証による両国の往来が可能となった現在でも、ラオス人がタイに長期間滞在し続けるにはタイ側の在留許可のほか、ラオス側の出国許可を必要とする。高等教育を修めた彼らにとって、外国人であるがゆえの不自由を甘受してまで異国に留まり続ける理由はなく、たいてい帰国すると還俗し、ビエンチャンで職を得る。

GDPの五割弱、就労人口の約八割を農業部門が占めるラオスでは、労働市場が小さく都市部の就業率が低いことが指摘されている（SCDPH 2006: 78）。とくに高学歴の若年層が希望する専門職や管理職への就業は困難とされるが、N T村出身の元出家者には公務員や大手の民間企業への就職を果たしたものが少なくない。彼らにおおむね共通するのは、第一に英語やコンピュータなど実務の即戦力となる知識や技術を在学中に習得していたこと、第二に、出家時に培ったさまざまな社会関係を介して情報を集め、個人的な紹介を受けたことである。さらに、長期間にわたる出家経験それ自体が雇用主の信頼を得る要因として働い

た。つまり、実務能力と多様な知己による支援、人格への信頼によって彼らは就職を叶えたのであり、それらすべてを獲得し、保証する手段こそ出家にほかならなかった（吉田 2009b）。

また、都市部に暮らすようになった元出家者の多くは村に残る家族と頻繁に連絡を取りあい、経済的に支えあっている。彼らは機会あるごとに送金を行い、訪ねてきた近親者に滞在先を提供するなどして、さまざまな便宜を図るのが常である。彼らの生活の様子はその家族を通して村落社会に認知され、新たな移動を誘発する。かつて見習僧が単身で寺院を捜し求めたことと異なり、昨今では近親者が同行してともに受け入れを願い出ることが多い。今日、都市部へ移動する見習僧の背後には、その社会的・経済的成功を期待する家族とりわけ親の意向が大きく働いている。

とはいえ、近年の急激な変化に対し、住民のあいだに戸惑いや葛藤がないわけではない。見習僧の移動の増加によって、人々が伝統と誇る「ルールの慣習」としての仏教実践、そして地域社会にどのような変化が生じたのか、次節では具体的変化と変化に対する人々の対応を検討する。

2 地域社会の変容と持続する実践

N T村において、かつては一人前の証であり伝統的慣行

の意義が大きかった見習僧の出家は、今日、都市部で勉学を続ける窓口としての意味を強くしている。進学を目的とする移動はある種の正当性を備えており、表立って反対するのは憚られる状況にある。とくに、党政府が推進する開発と発展の基盤としての教育の重要性を認識しつつ、村の連帯を守るネオホームの立場は複雑である。二〇〇四年から二〇〇五年にかけて、息子の移動許可を求める親たちに対して一度は思い留まるよう説得し、また、話しあいによって数人は村に残すことを決めたものの、結局は彼自身の孫を含む全員が村を出て行った。

見習僧が一人もいなくなったあと、寺院の本堂の扉は施錠され、朝夕の食施も行われなくなった。仏日には年配者が本堂に集まり読経を行ったほか、見習僧の代わりに俗人の男性が僧衣をまとい、境内の太鼓や銅鑼を打ち鳴らした。まもなく隣村から僧侶一名と見習僧四名を一年間に限り招請することになったが、その後、住民たちは新たに出家した見習僧は二年間村に留まることを取り決めた。人々にとって、問題の核心はカテゴリーとしての出家者の不在ではなく、同じ村に生きる子どもたちとともに養い、その成長を見守る慣行の消失であったといえる。しかし移動そのものを禁止するのではなく、移動を先延ばしにすることによって変化に対する折りあいをつけることになった。

また、将来的な可能性として年配者が指摘するのは、村

における宗教知識の断絶である。従来、出家中に学ぶ「ルーの文字」の読み書きは村落社会で生きていくうえで必要不可欠とされていた。しかし、見習僧が村の寺院に止住する期間が短縮化したうえ、還俗後は都市部に暮らすようになり、ルー文字を習得し、かつその知識を維持し続けることは困難となっている。実際に、都市部に暮らす元出家者のほとんどはルー文字の読み書きができない。また、村においてもラオス語の使用が一般的となり、ルー文字を使用する機会そのものが減っている。筆者が二〇〇六年に村を再訪した際には、見習僧たちがルー文字ではなく、ラオス文字によってパーリ語教典を学習していた。将来の都市部での生活を念頭におく彼らにとって、ルーの文字知識を学ぶことへのインセンティブは低くなる一方である。

ところが、興味深いことに、現在多くの見習僧や元出家者がルー文字の読み書き能力をもたないにもかかわらず、「ルーの発音」は根強く維持されている。ビエンチャン式の読誦を習得した見習僧も、一時的に帰村した際にはルー式の誦句によって三宝帰依や戒の授受を行う。また、都市部に暮らす元出家者も比較的簡単に短いルー式のパーリ語誦句であれば唱えることができる。忘れたつもりでいても「身体が覚えて」おり、「自然と口をついて出る」という。文字の伝統が失われつつあるのとは対照的に、声の伝統は出家者と俗人を問わず、移動先と送り出し側の双方におい

て継承されている。

同様に、移動先においてルー語の使用が途絶えることはない。普段はラオス語を使う人々も、NT村出身者に対してはルー語を使い、ラオス語を話そうものなら「ルー人ではなくなったのか」と揶揄される。ルー語の使用によって彼らが自覚するのは、ルー人としてのアイデンティティーと「ルーの村」とのつながりである。

また、NT村に残る人々にとってもいまやビエンチャンは遠い存在ではない。商用や親族訪問、農閑期の出稼ぎなどさまざまな目的で訪れる機会が増え、誰かがビエンチャンに向かうという噂を聞きつけると、こぞって近親者に宛てた食品や手紙を託す。ビエンチャンではNT村出身の見習僧が止住する寺院や近親者の居宅に滞在し、集まった人々と近況を伝えあうほか、村の家族への手紙や日用品、現金などを預かる。二〇〇四年一二月に村での携帯電話の使用が可能になると、翌年末までに一〇世帯が端末を購入し、遠隔地との情報伝達は飛躍的に向上した。緊急の要件でなくとも連絡を取りあい、互いの生活の様子が詳細に伝わるようになっていく。

現在のNT村の人々にとって、移動先は村の生活の延長上にあるといつてよい。村に残る人々は移動した人々とその経験を念頭におきながら日々の生活を営んでおり、出て行くものが村落社会との関わりを維持する限りにおいて変

化を許容しているようにみえる。他方、村を離れた人々は移動しながら多様な関係を取り結び、自らの生活環境を築いていく。見習僧の例が示すように、制度に沿って移動し、実践によって自他の差異を調停する当事者こそは、地域的・民族的境界の越境者といえるが、自らは村に留まりながら彼らの移動を支え、その経験を共有する人々もまた拡大する生活空間の担い手といえるだろう。移動先と村落社会との双方向的な関係が示すのは、国家の制度に容易に回収されることのない実践の持続と、個別地域において人々が展開する〈つながり〉の現実である。

結びに代えて

本稿は、北ラオスの一村落における出家行動の変遷を制度と実践の両軸から検討した。調査地であるNT村では、いまも独自の仏教実践を保持する一方、見習僧の都市部への移動が激増している。彼らは移動先の寺院で標準的な経典文字や読誦を習得するとともに、サンガ学校をはじめとする教育機関でさまざまな知識と技術を身につけ、国語としてのラオス語を使用し、多様な人々と交流しながら徐々に都市部での生活基盤を築いていく。

このような見習僧の移動は、制度によって形成された実

践といえる。中央集権化されたサンガ組織とサンガ教育の整備拡充、さらに昨今の交通事情の改善が地方からの移動を促進し、開発や発展を是とする党政府の態度がその行為に正当性を付与している。党政府による仏教の管理統制は、国家の発展に寄与する人材育成という新たな役割をサンガに課し、より多くの教育機会を住民に供するという点で一定の効果を上げている。また、国語としてのラオス語の使用や仏教の諸形式の標準化、中央が発信する価値体系の浸透は、いずれも国民統合のプロセスとして捉えられる。しかし、国家の対仏教政策の意図と、実践者にとっての仏教の内在的意味づけは必ずしも一致するわけではない。

たしかにNT村の見習僧は教育機会を求めて移動するが、その念頭にあるのは還俗後の都市部での生活と世俗社会での成功である。一介の地方出身者が出家することによって尊敬の対象となり、知識と経験を積んで社会的地位を上昇させていく。出家はこうした越境を可能とする回路としてあり、その媒介となるのは上座仏教徒に共通する実践であった。また、見習僧の移動の背後には、家族とりわけ親の意向が強く働き、移動後、また還俗後も両者は連絡を取りあい、緊密に結びついている。このような社会関係の連鎖によって村の生活空間は拡大してきたのであり、そうした実践を持続する人々にとって、出家は社会移動の重要な手段であり、仏教は地域や民族の境界を越えて多数派

の社会に参入する装置として機能している。

その一方で、仏教実践は自他の異質性を際立たせ、「彼ら」と「我ら」を差異化する指標ともなる。ルーの村落社会で独自の教典文字や誦句の発音が継承され、出家慣行や仏教儀礼にさまざまな意味が付与されていることは、住民がラオとは異なるルーの独自性を主張する根拠であり続けている。ラオスにおいて、近代国民国家形成の過程で進展した仏教の制度化や中央集権化は、少なくとも現在までのところ、地域社会における実践を平準化する力としては働いていない。政策と実態が乖離する現状は、諸民族の平等を謳うがゆえに、仏教を国民統合の求心力とすることに徹しきれない国家の葛藤を示している。多様性を許容する制度のもと、人々は実践によってさまざまな境界を強調ないし緩和しながら、関わりをもつ人々とのつながりを創出、維持、発展させ、動態的かつ重層的な現実を築き上げている。

本稿は、移動に伴い変容し再編されゆく地域社会において、変わらぬ実践が持続していること、また、独自のネットワークを駆使して生活空間の再編成を試みている人々の姿を明らかにした。そこには、教義や教典、国家の宗教政策の分析からはみえてこない宗教実践の現状と、多民族社会における制度と実践のダイナミクスが浮かび上がる。さらにまた、国民国家が分別する政治的・地理的境界とは別

に、人々が想像し、構築し続ける対象としての生活空間の存在が示唆される。それは相互関係のなかで生成し、絶えず変動する場——一種のミクロ・リージョン——と捉えることができる。地域社会の研究において考察すべき（地域）とは、地理的・歴史的な特殊性と、そこに生きる人々の営みの交差上に立ち現れる空間にほかならず、それゆえにミクロな生活の場に着眼する意義がある。本稿は、人々の実践から地域編成のメカニズムを解明するひとつの視座を提供したといえるだろう。

しかしながら、こうした移動に関わる人々の実践が、よりマクロな制度や空間編成のあり方にいかなる影響を及ぼしているのかについてはさらなる考察が必要である。また、移動がますますさかんになることで、村落社会に対する内外の評価、思い入れも変わっていくことが予測される。他者との関わりのなかで、人々がいかなるつながりを継承・発展させ、あるいは分断・希薄化させていくのか、今後の動向を注意深く見守っていきたいと考える。

●注

*1 改革派タムユットニカイは、一八三六年、タイのモンクット親王（後のラーマ四世）によって進められたパーリ聖典への回帰を唱える派であり、在来多数派のマハーニカイとは鉄鉢の把持作法、黄衣の着用作法、パーリ語発音などの相違がある（林 2000:9）。

*2 ラオスにおいて、伝統的な寺院教育に世俗教育を導入する動きは仏領期からみられ、一九〇九年にはビエンチャンに僧侶のための教員養成学校が設立されている (Ivansson 2008: 123)。ラオス王国の独立後、教育省が開設したバリー語学校は、一九六七年に仏教育協会に改称してサンガ教育の向上に努めた (Maha Khanyad 2006: 170)。

*3 一九九八年より中学校と高校は一貫教育とみなされ、呼称も前期中学校および後期中学校に改められた。本稿では複雑さを避けるため、前期中学校は中学校、後期中学校は高校と記述する。

●参考文献

- 石井米雄 (1979) 「ラオスのサンガ法——一九五九年サンガ勅令全訳および解説」『仏教研究』八号、六九—八六頁。
- 衆議院法制局・参議院法制局・国立国会図書館調査立法考査局・内閣法制局 (1957) 『ラオス王国憲法』和訳各国憲法集六〇、衆議院法制局他。
- 田辺繁治編 (1993) 『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』京都大学学術出版会。
- 林行夫 (2000) 『ラオ人社会の宗教と文化変容——東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会。
- (2003) 『宗教』ラオス文化研究所編『ラオス概説』めこん、二〇七—二四〇頁。
- (2004) 『活きる〈周縁〉、揺らぐ〈中心〉——移動するタイ系民族の国境域での仏教実践』加藤剛編著『変容する東南アジア社会——民族・宗教・文化の動態』めこん、一四三—

二〇〇頁。

—— (2008) 『仏教』桃木至朗他編『新版 東南アジアを知る事典』平凡社、三七九—三八二頁。

—— (2009) 「大陸部東南アジア地域の宗教と社会変容」林行夫編著『境域〉の実践宗教——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』京都大学学術出版会、一一—三頁。

林行夫編 (2006) 『東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容——制度・境域・実践』平成一五—一七年度科学研究補助金基盤研究 (A) 課題番一五二五二〇〇三研究成果報告書。

—— (2009) 『境域〉の実践宗教——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』京都大学学術出版会。

村上忠良 (2009) 「国境の上の仏教——タイ国北部国境域のシャン仏教をめぐる制度と実践」林行夫編『境域〉の実践宗教——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』京都大学学術出版会、一七一—二三四頁。

矢野順子 (2008) 『国民語が「つくられる」とき——ラオスの言語ナショナリズムとタイ語』ブックレット《アジアを学ぼう》一一、風響社。

吉田香世子 (2009a) 『ラオス・サンガ統治法』および宗教関連資料」林行夫編『境域〉の実践宗教——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』京都大学学術出版会、七八三—八〇一頁。

—— (2009b) 「北ラオス村落社会における出家行動と移動の経験」『アジア・アフリカ地域研究』九巻一号、一一—二九頁。

Condominas, Georges (1998) *Le Bouddhisme Au Village: Notes ethnographiques sur les pratiques religieuses dans la société*

ruale lao (Plaine de Vientiane). Vientiane: Editions des Cahiers de France.

Dommen, Arthur (1985) *Laos: Keystone of Indochina*. Boulder: Westview Press.

Ivarsson, Soren (2008) *Creating Laos: The Making of a Laos Space between Indochina and Siam, 1860-1945*. Copenhagen: Nordic Institute of Asian Studies.

Lebar, Frank M. and Suddard, Adrienne eds. (1960) *Laos: Its People Its Society Its Culture*. New Haven: HRAF Press.

Maha Khanyad Rasdavong (2006) *The History of Buddhism in Laos*. Vientiane: XANGKHOU Printing.

McDaniel, Justinth (2008) *Gathering Leaves and Lifting Words: Histories of Buddhist Monastic Education in Laos and Thailand*. Seattle: University of Washington Press.

Steering Committee for Census of Population and Housing (SCCPH) (2006) *Results from the Population and Housing Census 2005*. Vientiane: SCCPH.

Ongkan Phuttha Sasana Samphan Lao (OPSSL) (1998) *Thammun pokkhong song lao 2541*. Vientiane: SNLSS. (『仏暦二五四一年ラオス・サング統治法』ラオス仏教連盟協会)

Ongkan Phuttha Sasana Samphan Lao(OPSSL) (2005) *Thammun pokkhong song lao 2547*. Vientiane: OPSSL. (『仏暦二五四七年ラオス・サング統治法』ラオス仏教連盟協会)

Ongkan Phuttha Sasana Samphan Lao (OPSSL) (2008) *Bot lay ngan sapkhab kan bhuan vey viak ngan khong ongkan phuttha sasana samphan lao sok pi 2007-2008 lae phaen kan dam*

neun ngan khong ongkan phuttha sasana samphan lao sok pi 2008-2009. Vientiane: OPSSL. (『仏教連盟協会の二〇〇七年度の活動実施結果をめぐり二〇〇八年度の活動計画』ラオス仏教連盟協会)

Sunkang Naev Lao Sang Sat (SNLSS) (2005) *Banda sonphao may SPP lao (The Ethnic Groups in Lao P.D.R.)*. Vientiane: Department of Ethnic, Lao National Front for Construction.

(よじだ かみ)／京都大学地域研究統合情報センター